

# 共同体研究と

## 分業論

(甲府) 山室 周 平

共同体の解明のために分業の研究が有力な手掛りの一つとなるのではないかと考えている。大塚久雄「共同体の基礎理論」においては分業がライトモティフの一つとされているが(二五―六頁等参照)、あの本の中ではまだ分業の問題が充分展開されているとはいえないように思う。

小やかな試験ではあったが、われわれが農村の家族の機能と職業分業表を使って測定しようと思ひ立つたのも、実は分業についての含みもあつたことだったのである(社会学評論、才二一号の拙稿参照)。しかしこの場合も家族の問題に終始して、夫々の機能(職業)が夫々の家族によつて充足されていない場合、何によつて充足されているか、同族間によつてか、村落共同体によつてか、乃至は又専門的職業によつてか、といった点を一々について追求するところまでは及び得なかつたのである。

もともと分業論はツムメル、デュルケム以来社会学の伝統的な重要問題の一つであつたので、われわれにとり、ややかたによつては条件に恵まれているともいえるだろう。

いづれにせよ、共同体を繞る集居間の関係(職業)の配分関係の吟味、その歴史的な変り方の究明は、今後われわれにとつても、われわれなりに採り上げ、そうして寄与し得る一課題ではないかと考えている。ただ、そこ考えてはいるもの思うに任せぬ今日この頃であるが、関心を持たれる人々によつて何等かの形式でこの方面の研究が推進されてゆくことを望みたい。